

# 困難を抱えた子どもを支えるための 「みんなのつながるセミナー」

NPO 法人 浜松 NPO ネットワークセンター  
〒432-8021 静岡県浜松市中区佐鳴台 3-52-23

## 助成事業の概要

### 1. 子どもの行動と寄り添い方講座

(1) 「今、目の前にいる子の『わかった』を目指して～読むことや書くことに困難を持つ子への支援を考える～」

日時：2021 年 8 月 1 日 (日)

講師：井上賞子氏

(2) みんなのつながるシンポジウム

日時：2021 年 8 月 22 日 (日)

登壇者：井上賞子氏、遠藤雄策氏、笹田夕美子氏

### 2. アナログゲーム活用講座

(1) 「アナログゲームで分かる！生きやすいコミュニケーション能力の育て方」

日時：2022 年 2 月 27 日 (日)

講師：松本太一氏

(2) アナログゲームを遊び倒そう

日時：2022 年 3 月 13 日 (日)

登壇者：大隅和子氏、新村奈保美氏、野末洋子氏、山田恭子氏、稲津達義氏

学習支援教室や子ども食堂、高校カフェ、その他発達障害や学習障害といった特性を抱えた子ども達の支援をしている団体の人々が、支援の際により多くの選択肢で支援の方法を考えられるように、またその困難の原因を先入観なく理解出来るように、苦手（読む・書く・聞く・話す・集団行動など）を抱える子どもへのアプローチの仕方にフォーカスした「子どもの行動と寄り添い方」とコミュニケーションに効果のある「アナログゲーム」の2つのシリーズで2回ずつ講座を行い、

支援者同士の交流の場、協力体制構築のきっかけとすることが目的。

## 事業の成果

### 1.

(1) 特別支援教育士の井上賞子氏より、教育現場で実際に学習に困難を感じている子への支援事例の紹介があり、困難の背景に目を向けること（問題は支援方法にあるという視点）が共有された。視力の悪い人がその人に合ったメガネを使うように、支援もオーダーメイドであるべきで、一人一人に合った支援でなければならない。量を増やしても方法が間違っていれば苦しいだけで、それを繰り返されればやる気がなくなり自己肯定感も低下してしまうとのことだった。約 65%が学校関係者・子ども支援関係者であったため、この考え方の共有は今後教育現場で実践されることが期待される。

(2) 井上賞子氏に加え、小児科医の遠藤雄策氏、行動コーチングアカデミー・児童発達支援事業所ハンナに勤務している笹田夕美子氏の3名より「コロナ禍は、子どもたちにどのような影響を及ぼしたか、そのために何か新しいサポートをする必要があったか」「そのサポートに何か課題はあったか。新しい生活の中で、私たちが子どもたちとどう寄り添ったらいいか」「大人たち、社会の大人たちは、どのようにして子どもたちの個性という輝きを見つけ出し、それを守っていくためにどうしたらいいのか」の3点について意見交換がされた。その子の好きな事や物を増やしてい

く、続けさせてあげること、子の支援だけでなく親の支援の大切さなどを再確認出来るシンポジウムとなった。

2.

(1) アナログゲーム療育アドバイザーの松本太一氏より、コミュニケーションの前提となる言葉やルールを、アナログゲームを通して学んでいくこと、発達段階に応じたアナログゲームの紹介がされた。終盤ではルールを守れない子に厳しくしてしまう子についての質問があり、その場合は競うゲームの前に協力して進めるゲームを使用することが提案された。ゲーム中の癇癢に悩む参加者も多く、その解決方法を知れたのは重要なことであった。

(2) 浜松の教育現場でアナログゲームを使い活動している5名を招き、事例紹介を行った。家庭の子育てで使用している講師、中学校で講座を開いている講師、言葉の教室で使用している講師、というようにそれぞれのより具体的な使用例の共有が出来たため、より「自分が使用するとしたら」の想像が出来る講座となった。

## 成果の広報、公表

8月1日の井上賞子氏の講座へ静岡新聞の取材があり、8月10日に誌面とインターネット上の両方へ掲載されたため県内だけでなく県外からもアクセスがあった。また、当法人の発行しているニューズレター上で子どもの行動と寄り添い方講座の報告を掲載した。アナログゲーム活用講座については、当初対面での講座であったものの、まん延防止等重点措置の延長に伴いオンラインでの開催となり取材はなかったが当法人のホームページでも更新に合わせて成果の広報を行っていく予定である。

## 今後の展開

この事業を通して初めて当法人の講座に参加した方と繋がる事が出来、登壇した講師と参加者が繋がることで、新たな学びの場が生まれることもあった。講座内の質疑応答とそれに対する講師が回答する様子を見ると、現在子ども支援者同士が悩みや相談を共有できる場は少なく、共有出来れば解決出来るだろう問題が多くあると感じた。近年のコロナ禍で以前は出来ていた講座後の交流会があまり出来なくなっていたが、今後はそんな中でも交流が出来る方法を模索する必要があるだろう。対面での講座の予定であったアナログゲーム講座も、やはりオンラインでの説明では実際に体験するより伝わらない部分が多く、感染状況が落ち着いた際には再度対面で体験する機会を設けられたら、と考えている。同じ立場の人同士が繋がることで新たな取り組みや解決策が生まれる可能性と、そのための場づくりの必要性が明らかになった事業となった。